

第 21 回 関川流域委員会 議事要旨

開催日時：令和 3 年 3 月 30 日（火）17 時 00 分～19 時 00 分

於：上越市市民プラザ 第 3 会議室

【第 21 回関川流域委員会の概要】

前回委員会で優位であると判断された B ルート（西側ルート）について、各地域で住民説明会を行い、今後も引き続き住民の方への説明と対応を続けていくこととし、「B ルート（西側ルート）が妥当であると判断」との意見が示された。

今後の進め方に関する議論では、保倉川放水路事業やまちづくり事業と併行し、現在の気候の変化に伴った豪雨の増加による整備計画の変更についても委員会で進めていくとの意見が示された。

1. 意見募集・住民説明会結果とその対応について

事務局より「意見募集・住民説明会結果とその対応について（資料 1）」に関する説明を行った。

（委員）

- ・ それぞれの住民説明会での、「スケジュールを早く示してほしい」「スピード感をもって」という要請は、早く放水路を造ってほしいという意見だと捉えてよいのか。

（事務局）

- ・ 説明会会場で、まさにそのような話が出ているため、早く放水路を造ってほしい、という意見だと理解しているところである。
- ・ 会場の雰囲気では、反対意見の方が少数いるが、反対意見に賛同する方というのはほとんどおらず、やはり放水路を進める前提で質問いただいているという印象を受けた。

（委員）

- ・ 地域住民の方から同様の放水路の事例があれば教えてほしいという意見があるが、例えば環境問題などのご質問も来ているようなので、一般的に「放水路というものを造ったらこうなります」ということをご理解いただくためにも、そういった類似の事例を提示することで理解が早まるのではないかと感じた。

（事務局）

- ・ 放水路の事業としてはたくさんあるが、地形条件、勾配、水利用があり塩が入ってきては困るとか、なかなか、保倉川放水路事業のイメージとマッチするような事例が見つからないというのが正直なところである。似たような事例を情報収集して提供できるように今進めているところである。

（委員）

- ・ 新潟県に限らず日本海側の河川では砂丘が発達するもので、その裏に後背湿地があり、切れ目のところから川が流れるというタイプの川が多いので、信濃川や大河津分水路、関屋分水など事例が多い。ただ事務局の指摘の通り、それぞれに個性があり、ぴったり「こうなります」ということを言うのは

難しいが、確かにいろいろな事例をご紹介いただく機会を持つというのは大変いいことではないかと思う。

(委員)

- ・ 津波対策に関する意見もあったが、津波に対する危険度というのは、ほかの放水路はどう考えているのかということも参考になるのではないかなと感じた。

(委員)

- ・ L1 規模については施設で防御するというので、放水路ができて変わらないということになるかと思うが、L2 規模では要するに命を守る対策、ソフト対策で基本対応することになるため、砂丘に放水路を開くとその危険性というのはもちろんゼロではない。それに対して地域がどういった体制を整えるのか、つまりソフト対策を整えるのかということになるので、その対策の整え方というのを地域と国とで議論しながら住民の方々と協力していただいて対応することになるかと思う。津波の想定といった情報も参考にしながら、ほかの放水路事例を比較するというのは大変大きな示唆となると感じる。

(委員)

- ・ おそらく L2 規模の話かと思うが、最近配布された上越市の津波ハザードマップで、新堀川のところで津波が遡上して後背湿地に広がるという想定になっている。L2 規模の津波は、ハード対策で防ぐという前提ではなくソフト対策が基本となると住民の方に説明し理解していただくことが必要だと感じた。

(事務局)

- ・ 保倉川の河口部については、上越・糸魚川沖の F 4 1 断層が想定されており、大体五千年に一度の周期という低頻度である。だからといって L2 の津波が発生しないというわけではないため、一般的に最大クラスの L2 規模の津波は、住民等の避難、ソフト対策として取り得る手段を尽くした総合的な津波対策の確立が必要とされているため、その辺りを考慮して地域の皆様の意見を踏まえながら検討を進めていきたいと考えている。
- ・ 放水路事業によって大量の土砂が出るため、残地を盛土して避難所として整備することが有効かどうかというのを含めて、まちづくりのほうと併せて検討していきたいと考えているところである。

(委員)

- ・ 瀧川との関係を質問されている方が何人かいたが、瀧川と放水路はクロスするため、瀧川の水も放水路に流すと考えてよいのか。瀧川も氾濫のリスクがかなりある川だと思うので、瀧川の水害対策にも寄与するということがきちんと説明できれば、メリットとして説明できるのではないかなと感じた。

(事務局)

- ・ 瀧川の河道計画をよく調べてからの判断になるが、放水路には流すことは可能だと考えている。洪

水は流して、維持的な水量は例えば下を通すサイフォン形式で流すことも考えられる。潟川は低平地の最も低いところを流れているので、浸水のリスクを解消すれば、農地も浸かりにくくなって安定して作物が収穫できるようになるというところでは、メリットとして説明できると思う。その辺も見据えてしっかりと設計したいと考えている。

(委員)

- ・ 潟川の洪水時の水位は明らかに海の水位よりは高いが、潟川はぐるりと回って海まで行くため、距離が長い分、勾配が緩やかになって水が流れにくくなっている。その海への接続を短くするのであれば、洪水を吐くという観点からは、基本的にはプラスになる。一方で、用水の観点からは、必要量を確保することが必要となるので、サイフォン等の対応というのが必要になってくる可能性がある。設計次第でプラスの効果が出ることは可能であるかと思う。

(委員)

- ・ 津波の遡上関係で、圃場整備の塩害について、植物は塩分濃度が高ければ枯れてしまうのでしっかり対応していただきたい。また、最近地球の温暖化によって 50 年に 1 回、100 年に 1 回の災害が頻発するおそれがあると言われているので、これまでの気象統計だけではなくしっかり対応する必要があるのではないかと思う。津波遡上や海水の逆流等による塩分濃度の情報が分かれば、ある程度ローカルな対応もできると思う。細やかな対応をしていかないとなかなか農家が安心して賛成できないのではないかと思う。

(事務局)

- ・ 塩水の動きについては、近くに潟川、新堀川があり、そこに塩水が入ってくる時期もあるので、しっかりとデータを取り実態を把握したうえで、保倉川ではどうなるのかということ把握したいと考えている。

(委員)

- ・ 塩水のモニタリングや、それを農家の方々にお伝えできる体制づくりは不可欠だと思う。
- ・ 災害の外力について、L1 というのは数十年から百数十年というスケールで、それに対する防御は施設でやるということをレベル 1 と言っている。地震津波で L2 と言っているのは、東日本大震災のように数 100 年、1,000 年というオーダーになってきており、これは気候の変化とともに変化しているということはない。時間スケールは同じだが、一方で、気候の変化とともに洪水は大きく変化している。地震、津波のほうは洪水とは違うので、先ほどの時間スケールはそのままとなる。

(委員)

- ・ 住民からの意見募集で、いずれの説明会においても共通しているのが、「分かりやすい説明をお願いしたい」という点だと思う。「B ルートのメリットが感じられない」、「B ルートで決定か、優位とかではわからない」というような意見がでていたため、当委員会で B ルートが優位と決まったのであれば、配布しているパンフレット等で B ルートのメリットをもっと説明する方が、住民の方に伝わるのではないかと感じた。

(委員)

- これまでの技術的な検討で放水路が一番適しており、地域分断や環境負荷が小さいものを選ぶべきだということでBルートが優位であるとしているが、それがわかるような工夫が必要である。

(事務局)

- 意見用紙で「パンフレットだけではわかりづらい」という声も届いている。住民説明会はこのパンフレットに基づいて説明をしており、概略ルートの質問や優位性の話は出てきていないが、機会をみて説明に伺うとともに、分かりやすい説明ができるよう工夫していく。

(委員)

- 今回の説明会が2月～3月の間に行われているが、「東日本大震災から10年」という報道が多くされた時期でもあったことから、津波に対する恐怖というのが色濃く出たのではないかと思う。これがもし6月～7月の洪水が起きる時期であれば、津波よりは洪水への懸念が出るのではないか。放水路という「洪水を防ぐためのもの」について、説明会の時期を変えればまた違った意見が出てくるのではないかと思うので、考慮いただければと思う。

(委員)

- やはり住宅の移転の話を懸念されている方が多く、農業を営む方は集落の場所と農地の関係を気にされている。住民移転については、コミュニティーを維持できるような移転ができ、移転後も営農がしっかりできるということを丁寧に説明するということが大事なのかと思う。一番影響が大きいのが浮島地区で、説明会の時間が長いのもそうした切実な問題があったからなのだと思う。この地域は生業として農業の位置づけがかなり大きいと思うので、圃場とコミュニティーの関係も、水田の水のこともなどもあり、よりシビアになるだろう。放水路がBルートに決まり、あなたは引っかかりますよというだけではなく、その後のコミュニティーの持続可能性まで考えていくという姿勢を示すことで、住民の方々の不安も少しは軽減するのではないだろうか。

(事務局)

- 委員のご指摘の通りで、説明会では自分たちの生活の糧といった心配事が非常に多く聞かれた。この場である程度ルートの方向性が決まれば、集中的に時間を割いて、しっかりと地域の方を考えた視点でご提案しながら進めていきたいと思っている。

(委員)

- 特にこの地域づくりという部分は、国と上越市が協力して、丁寧に進めることが大事であるので、しっかり連携していただきたい。

(委員)

- 流域の住民の皆さんに対し説明会を開催し、御意見を聞いていただいたことに感謝申し上げます。地域住民の方は、放水路が良いか悪いかという議論より、スケジュールや構造がどうなるかを心配しており、放水路を整備することが地域にとって必要であることを前提として、では今後どのように

取り組んでいくのかという議論に変わってきたように感じている。しかし、地域の分断感や住宅の移転など、地域の方は依然として不安を感じているため、それぞれの課題をしっかりと住民に説明していただくことでBルートに理解を示してくれるものと思う。

- ・ 津波、洪水、塩害の話も出ており、農業をやっている皆さんにとっては、本当に死活問題であり、洪水がないときは絶えず海水が放水路に入ってきていることを考えると、イメージ的に住民の皆さんがまだまだ懸念に感じておられるようだ。それにきちんとお答えしていくことが大切と思う。これからしっかり検討しながら上越市としても地域住民の皆さんに説明していくので一緒に努力していきたい。

(委員)

- ・ 地下水に関する懸念が幾つか出ていたが、これはシミュレーション結果を示した上で、さらにまだ心配だということなのか。

(事務局)

- ・ 地下水については、まだ流動機構まで調べられていない。高い地下水を分断してしまうと下手のほうに行かなくなってしまうため、これから流動をしっかりと精査し、対策が何か必要か調べ検討したいと考えている。

(委員)

- ・ 放水路という社会基盤は、地域の人々の日常を安全で豊かにするために造るものであるという認識を皆さんで共有いただくと、放水路という社会基盤をすることによって、その上にある日常を新たに作っていくという、むしろ前向きなご意見も承れるようになるのではないかと思います。
- ・ 概略ルートについては、前回、Bルート（西側ルート）が優位であると判断させていただいた。それを踏まえて住民説明会を開いていただき、一部事業反対のご意見もあったが、全体としては、このBルートの優位性を改めるようなご意見はなかったと判断している。住民の方々からいただいたご意見については、分かりやすく事例を示して説明することが非常に大事であるため、ぜひそういうやり方をとっていただきたい。これを包括し、当委員会としては、前回優位であると判断したBルートで放水路をつくるということが妥当であると判断したいと思うが、いかがか。

委員一同：「異議なし」

(事務局)

- ・ Bルート（西側ルート）が妥当であるというご判断をいただき、事務局は放水路の事業者として、このBルート（西側ルート）で決定させていただき、スピード感をあげてまちづくりや関係機関との調整を進めて参りたい。

2. 今後の進め方（案）について

事務局より「今後の進め方（案）について（資料2）」に関する説明を行った。

（委員）

- ・ 保倉川において、関川との合流点で、土砂が堆積する箇所がたくさん出ている。また、合流点の近くの上越マリーナの中に砂がたくさん堆積してしまっており、船の出入りができないというような状況になっているので、そうした箇所を浚渫する等の整備も検討していただきたいと思っている。

（事務局）

- ・ マリーナの土砂堆積については承知している。また、保倉川全体としては洗掘しているところもあれば堆積しているところもある。いずれにしても既存のインフラをしっかりと維持し、土砂堆積についてモニタリングし、必要な対策を実施するということが大切だと思う。県とも連携し、既存の施設も管理しつつ放水路事業も速やかに進めるという体制で進めて参りたい。

（委員）

- ・ 流域治水にも関連するところであるが、昨今、国と県の管理境界で被災する事例が多い。特に接続部分の強化というのはぜひお願いしたい。
- ・ 今計画されている雨の量を全国的に 1.1 倍に変更することを国土交通省で検討しており、昨年の上野川などの現在の河川整備基本方針を既に上回っている洪水の事例がある河川から基本方針の改定を検討する予定である。保倉川についても、整備計画の水準を上げるのか、気候変化に追随するのか、そういった整備計画の変更が必要になってくる。そういった議論も保倉川放水路、あるいはまちづくりの議論と並行しこの流域委員会で進めさせていただくことになるということであるが、よろしいか。

委員一同：「異議なし」

（委員）

- ・ 保倉川流域に立地している上越商工会議所会員の企業数が約 600、そこで働いている方が約 1 万人となる。長い間、商工会議所としても、流域企業の方々から早く放水路事業を実現してほしいという要請を受けている。放水路事業だけではなく、まちづくりという点でも経済界も協力できている。早く放水路を造ってほしいというのが実感としてあるので、ぜひスピード感を持って進めていただきたい。

（委員）

- ・ 世界中で洪水の頻度は 3 倍増加している。100 年、200 年で基本方針を作成しているところが、どんどん記録が塗り替えられるという事態になっているため、流域治水という政策により、流域に関わる全員で取り組んでいこうとなっている。そういう意味でも、ぜひスピード感を持って事業を進めていただきたい。

－ 以 上 －